りりかる☆マジ狩る

ナバター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
りりかる☆マジ狩る

【Ｎコード】
Ｎ４４７７Ｚ

【作者名】
ナバター

【あらすじ】
リリカル☆なのはと思われる世界、そこには前世の記憶を持つ者達が多数存在した。
その中の一人、青野大樹を中心として展開される日常の物語である。

出会い（前書き）

これは『機動六課のお荷物』の主人公である灘将臣では出来ないシチュエーションを性格の違う今作の主人公、青野大樹でやる息抜き作品です。

『機動六課のお荷物』よりも展開は大道風になっています。

出会い

「あぁ～！訳わっかんねぇよ！」

俺はシャープペンシルを投げ捨て、足を蹴り上げてノート類が乗ったちゃぶ台をひっくり返した。

どうも最近気が短いようだが多分あれだ、９歳だから反抗期が近いとかそんなんだ。

「あ、青野！落ち着け！」

「うるせぇ！なんで休みの日にテメェの家で知らねえ女ついて勉強しなくちゃなんねーんだ！」

そう、いま現在この俺、青野大樹（あおの たいき）はこのお節介、橘良途（たちばな りょうと）の家で勉強している。

確かに俺はあまり頭の良い方ではない、が、俺が通っているのは普通の小学校、リョウトが通う私立聖祥大附属とか言うエリート小学校とは違う、流石に勉強についていけないと言う事はない。

なら何を勉強してるかって？それが笑える事に『ある特定の女子』についてだ。

今やってるのは『高町なのは』、『フェイト・テスタロッサ』、『八神はやて』の三人だ。一週間前から始まったこの勉強会で名前を覚えたんだが、写真はないらしく顔は知らない、リョウトが書いた似顔絵と特徴を聞いただけだ。

わかる訳ねー。

こんな事をやるには理由がある、簡単に言うとこの世界がある『物語』に酷似していて、俺とリョウトはその『物語があった』世界の記憶を持っているからだ。

題名は聞いた事がある、たしか『魔法少女リリカル☆なのは』とか言う名前だ。……日曜日の朝にでもやってたのか？

兎に角その物語と類似しているこの世界において、物語を知っておく事がアドバンテージや判断材料になるとリョウトが言い出した事でこの勉強会は始まった。

リリカル☆なのはなんて見たことなかった俺は、今かなり苦労している訳だ、まさかアニメを見なかった事で勉強するハメになるとは思わなかった。

蛇足だがリョウトが以前『ここは物語の中だ』と言った事があり、大喧嘩になった。

物語にいくら似てようと俺達は生きていて、アイツらも生きている、誰かに作られた、決められた物語通りに生きてると考えるのは無性に腹がたった。

「よ、よし！とりあえず休憩にしよう、一応大まかな事は終わったし」

「魔法とか管理局とか信じろってか？たしかに俺達には前世の記憶があるけどよ、だからってこの話は突飛過ぎるぜ」

「いや、魔法は見せたしお前もジャケットとか色々展開出来るだろ！」

そう…俺とリョウトの共通点の一つ、それが魔力の有無だ。リョウトはＳ２Ｕとか言うデバイスまで持っている。

俺はデバイスは無いが、基本的に魔力で強化した体での肉弾戦しかしないので意味がない。あんな杖で思い切り何かをぶっ叩いたら折れちまいそうだし、明らかに打撃攻撃用じゃない。

「ま…そうなんだけどよ、あんま信用出来ねぇ」

「疑い過ぎだろ」

口では一応そう言うものの、リョウトの事は多分一番信用している、何だかんだで付き合いは長い。

ひっくり返ったちゃぶ台を直し、散らばったノートと筆記具を拾い集めるリョウト、俺は冷蔵庫から勝手に持って来た葡萄ジュースのパック口を明けラッパ飲みする。

「はぁ…コップあったろ？」

「洗いもんが増えるじゃねーか」

「行儀が悪いって言いたいんだよ僕は、全く」

一リットルをあっと言う間に飲み干して紙パックを潰す、時刻は午前１１時４分、そろそろ腹の虫が騒ぎ出して来た。

「飯どうすんだ？まぁ俺は五百円しかねぇけど」

俺は普通の小学生だ、お年玉のような何か特別な臨時収入がない限り懐は寒い。

「たしか冷蔵庫に焼きそばとキャベツがあったから、焼きそばで良いなら作るけど？」

「食えりゃなんでも良いぜ」

リョウト曰わく、料理が出来る男子は最近珍しくないが俺には無理だ、手順やら分量やら覚えてられない。

「じゃぁ大人しく待っててよ」

「寝てる」

腹を減らして飯を待っている時間は退屈で長い、ここは今日リョウトに朝早く起こされた分寝るしかないだろう。

◇

昼飯を食べた大樹達は結局勉強を中断、かなりの甘党であるリョウトがなのはを見た事の無い大樹の為に普段それとなく避けていた翠屋へ行く事になった。

「大樹ちょっとストップ」

「なんだよ？」

「結界に巻き込まれたみたいだ…全然人がいない」

現在二人が歩いているのは歩道橋、下には片側三車線の大きな道路が走っているにも関わらず動いている車はおろか見渡す限り人がいない。

「マズいね…どうする？」

「翠屋はすぐそこなんだろ？どうせどっかの馬鹿が喧嘩してるんだろうぜ」

原作キャラ、そう呼ばれる者達を狙う転生者は多い。そう、大樹や良途が把握しているだけで既に２０人以上の転生者がこの町には存在していた。

転生の理由はわからないが、兎に角転生者が魔力を持ち、その殆どが頭が良く容姿端麗、何かしかのスキルを持っている事もある。

推測ではあるが、魔力を持つという事以外、才能や外見を含め能力やデバイス、知識をランダムに持っているらしかった。

今まで見つけた転生者を見ると、高確率で得られるのが容姿、才能、知識、デバイス、能力の順調らしく能力持ちは良途も未だに一人しか知らない。

もっとも転生者と判断しても不用意に接触せず、言動や行動から推測している為能力やデバイスを隠している可能性はある。

だが基本的に転生者と一般人にさほど変わりはない、大樹から言わせると『顔が良いだけ』であり、才能と言ってもずば抜けたものはなくやはり本人の努力や人間性に大きく左右されているようだった。

前世で怠けていた人間が、体が変わったからと言って劇的に性格や生活習慣を変えられる訳がない。

その為魔力があってもまともに扱えないものが多い。良途が『マズい』と発言した理由はそこが関係していて、結界など魔法が使える転生者はごく一部だからだ。

必然的に魔法が使える者は努力家、真の天才、知識持ち、能力と危険度が高い者に絞られてくる。

大樹と良途は努力家の部類に入る。良途が知識持ちで信頼出来る人物から魔法の発動原理や魔法陣の組み方の基礎情報を買い、大樹に教えつつ試行錯誤しているのが現状だ。

「戦っているのか、一方的に襲っているのか…はたまた訓練か、訓練の線は薄そうだけど」

「とりあえず結界を張った奴を探そうぜ、近くにゃいなそうだ…」

「細かい操作が苦手で大きくし過ぎたか…大規模な戦いを想定したか……派手な爆発とかは見えないし、まだやり合ってないか前者かな？」

良途が待機状態だったＳ２Ｕをセットアップし、良途自身も灰色のバリアジャケットに身を包む。

まるで学ランのような飾り気のない簡素なデザインで、良途曰わく管理局武装隊のアンダースーツを模してアレンジしたらしい。

「手分けして探すか？」

「いや…青野がいくと喧嘩になりそうだから、一緒に探そう。……能力は使わないでよ？」

大樹の能力は極力良途は使わせたくない、理由としては大樹の身を案じているからだ。

「んな事分かんねえよ、出し惜しみしてやられたくないしな」

良途と同じようにバリアジャケットを展開し、大樹は右手で拳を作りながらそれを見つめる。

大樹のジャケットは上下黒、右腕の袖がない上着、インナーは紫。デザインは大樹の前世に存在した彼の好きな作品の主人公、ロストグラウンドの悪魔と呼ばれる憧れの男、その私服だ。

「はぁ…じゃぁいつも通り無茶しなくていいようにサポートするしかないか」

「必要ねーよ、自分を第一に考えろって」

二人は歩道橋から空へと舞い上がり、結界の展開者を探し始めた。

そして直ぐに遠くから響き始めた爆発を聞きつけた。

同時刻、音のした方向には公園があり、そこでは二人は少年が魔法を使い争っていた。

いや、正確には片方は一方的に襲われていた。

「くっ！止めてくれ！どうして僕を狙うんだ！？」

「うるせえ！さっさとデバイス寄越せ！」

金髪、正確にはハニーブロンドの髪を持つ少年はシールドを張り、赤髪ロン毛の少年の放つ魔力弾を必死に防御する。

赤髪の少年の魔法は威力こそ平均以上だが無駄が多く、狙いもいまいちな為周囲の地面や建物を次々破壊していく。「見つけた、派手に暴れているみたいだけど…多分今始まったばかりみたいだ、青野！金髪の方を援護するよ！赤髪を止める！」

「あぁ、金髪の野郎は知り合いか？」

「いや…多分僕が一方的に知ってるだけだよ」

爆発音を聞きつけ、空から二人を発見した大樹と良途は良途の指示で金髪の少年の援護をする為速度を上げる。

「ちっ！渡さねーならさっさとくたばれよ、別に死体から奪えばいいだけだからな」

赤髪の少年は魔力弾から砲撃へと攻撃を切り替え、両手で魔力を操作する。

魔法の技術は未熟だが魔力量にものを言わせ、力でごり押しするつもりなのだろう。
実際魔力がある程度使える転生者の戦いは、技術ではなく魔力量と、どちらが先に大魔力での攻撃を当てられるかで勝敗が決する、一人前の魔導師からすれば敵ではない。

しかし金髪の少年は赤髪をあしらう実力と知識を持っていたが、不眠不休での活動が続いていた為、魔力や体力、精神力共に限界だった。

「死ねぇ！ブラスターキャノン！」

雑に集められた魔力での砲撃、だがずば抜けた魔力量が通常拡散し、十分な威力が発揮される事のないそれに人を殺せるだけの威力を持たせていた。

「っ！？マズい！」

「ちっ！あの糞野郎を逃がすなよ！」
全速力で飛行する大樹達だが赤髪の砲撃着弾にはギリギリ間に合いそうもない。

それを悟った良途は悔しさに拳を握り締めるが、大樹は諦めず進路を赤髪の少年への攻撃から金髪の少年へと変えた。

同時に小さな爆発音にも似た音が連続し、そしてビルの一部が削れるように消え虹色の光へと変わり大樹の体へと集まる。

「青野！？」

紫色の魔力が迫る中、金髪の少年はバリアを二重にする事を試みるが、ダメージと疲労で既に展開中のひび割れたバリアを維持するだけで精一杯だった。

（こんな所で…僕はジュエルシードを集めなくちゃいけないのに…）

次の瞬間、視界が紫色の魔力光で染まった。

◇

眼前に迫った砲撃の光に、金髪の少年ユーノ・スクライアは目を閉じ、悔しさで歯を食いしばった。

自らが発掘し、そして輸送中の事故でこの世界に散らばってしまった危険なロストロギア、ジュエルシード。

その回収の為に一週間、不眠不休で活動し見つけたジュエルシードはまだ二つ。そればかりか現地の魔導師らしき人物に目撃されるや否や襲われる始末。

被害を抑える為に結界を張ったが、少年の攻撃は雑で荒かったが威力と魔力量はあるらしく、やむなく広域結界を使う羽目になった。

魔力など雀の涙程しか残らず、体力も限界、悔しさと情けなさ、そして理不尽への怒りが込み上げてきた。

だが、今自分が過去を振り返っている事が、俗に言う『走馬灯』なねかと思うと途端に悲しくなった。

死にたくない、まだ終われないとも思った。

そしてふと我に返ったユーノは冷静に現状を把握した、『砲撃が来ていない』、ゆっくりと目を開けた先には上下黒い服、背中には二枚の赤い羽根のような装飾、そして全体は確認出来ないが、それでも一番強く視線を引き付けたのは黄金の右腕。ユーノを庇うように重心を下げ、右腕を突き出した謎の少年がいた。

「衝撃のファーストブリット、ギリギリ間に合ったな……しかし、ヌルいな…テメェ」

右腕を突き出していた少年はゆっくりと右腕を下げ、踏ん張っていた足腰から力を抜き、脱力感を漂わせながら立ちつくす。ユーノからは見えないが、敵に向けた少年の笑みはまさに肉食獣を彷彿とさせるものだった。

出会って良かったのか？

赤髪の方の対象を僕に任せた青野は忠告を無視して能力を使った。

青野のレアスキル『アルター』はシェルブリットと言う右腕に融合装着するタイプのもので、ある作品の主人公の能力だ。

特に背中にある三枚の羽根を推進力に変換し打ち出す技は、三発という回数制限はあれど強力なものだ。

現に雑とは言え魔力の塊である砲撃を、拳を突き出した衝撃だけで割ってしまうのだから呆れる威力だった。

優れた戦力であるシェルブリットの使用を、良途が止めるには理由があった。

大樹のアルターは右腕を媒体にした融合装着型、故にアルター化の際には激しい痛みを伴うばかりか、使えば使う程肉体は元の形質を忘れ金属化の後遺症が広がる。

それは日常的に激痛を与え、そしていつか心臓に達するのではないかというリスクを使用者に与える。故に安易に使用を許していいような能力ではない。

大樹は今の所その兆候は一切ないと言っているが、良途はやはり使用しなくて済むのならそれでいて欲しかった。

「そこまでだ！」

青野の乱入により一瞬呆けた赤髪の少年の背後からデバイス『S2U』を突き付ける。

本当はバインドで拘束したいのだが、赤髪の魔力を考えるとバインドを破る為何をしてくるかわかったものではなかった為、敢えて背後から武器を突きつけるという原始的な方法をとった。

「おいおい！なんでソイツを庇うんだ！？ソイツに取り入ってなのは達に近付くつもりかよ？」

「質問するのはこっちだ、何で彼を狙ったんだ？」

理由はなんとなくわかっていた。恐らくデバイス欲しさか、ユーノを亡き者にし自分が『高町なのは』にデバイスを渡し、サポートする者にでもなるつもりだったのだろう。

「あ、あの…君達はいったい？」

「敵じゃねーよ、多分な」

良途と赤髪のやりとりを眺めつつ、ユーノは大樹の隣りまで歩みよる、近付くで見ると怪我や汚れ、表情から読み取れる疲労は予想以上だった。

「誰が答えるかよ、勝ったつもりでいるようだけどさ、俺まだ本気は出しちゃいないぜ？」

「抵抗は無意味だ」

「ウルセェ！」

反抗の意志を見せ、魔力を操作し始めた赤髪。良途は撃つべきか迷った、非殺傷設定にしているとは言え自分はまだ未熟、人を気絶させ得る威力での魔法が本当に人体に影響を与えないのかどうか不安に思ってしまったのだ。

良途に振り向きながら砲撃を繰り出そうとする赤髪、だが少年が警戒すべき相手は良途ではなかった。

シールドを展開しながら、良途は赤髪の後ろに迫る大樹を視界の端に捉えた。

緑色のエネルギーを背中から噴射させ、空中を弾丸のように突き進み、そして体を回転させ生まれる遠心力さえ打撃の威力に上乗せする一撃、それが赤髪の背後に迫っていた。

きっと青野は良途を案じ、赤髪の少年が反抗的な態度を取るや否や走り出していたのだろう、それは良途にとって嬉しい事だったが、シェルブリットの一撃を受け相手がとても生きてはいられないであろう事もすぐにわかった。

「ブラスターキャノン！」

「やめろ青野！」

「撃滅のぉ！セカンドブリットォォッ！」

撃ち出された砲撃が良途のシールドに直撃するが、その瞬間大樹の右拳が赤髪の背中を捉え、殴り飛ばされた少年の砲撃は消えてなくなった。

少年は地面に叩きつけられ、何度かバウンドしてから激しい音をたて滑り台に突っ込み、直後砂埃が大量に舞った。

「くっ！殺したのか！？」

「一応加減はした…死んでるかどうかはアイツ次第だけどな」

バリアジャケットがなければ貫通、もしくはバラバラになっていてもおかしくない一撃だった。

確かに加減はしたもののギリギリだった、大樹も良途が狙われた事で頭にきていたのだ。

すぐに良途が吹き飛ばされた場所に駆け寄る、滑り台は変形しその役割を既に果たせない鉄屑になっていた。

「ぐ…ぁが…」

「良かった、生きてる……魔力が高いからそれだけジャケットも強固に出来たのか」

砲撃魔法の雑さが嘘のようなバリアジャケットの強度に良途は関心した、あの一撃を受けギリギリではあるがジャケットは原型を留めている。

「どうすんだ？そいつ」

別段急ぐ事なく、良途の後ろまで歩み寄った大樹が少年を覗き込む。

「結界を解除したら救急車を呼ぶ、幸い命に別状は無さそうだ。えっと…そういう事だから結界解除してもらっていいかな？」

「あ、はい」

不意に話しかけられ少々緊張しながらユーノは結界を解除する。その瞬間、張り詰めていた気が抜けたのかへたりこみ、ジャケット解除と同時に眠ってしまった。

「とりあえずコイツも病院だな」

あの一瞬、友達が死ぬくらいなら殺人者になっても仕方ない、そう考えた大樹は誰も死ななかった結果にそれなりに満足していた。

大樹がユーノを担ぎ、良途は救急車を呼びその場を去った。

◇

「助けて…ムグ、頂いて…ゴクン…ありが」

「あー…、いいからとりあえず食べて食べて、何も食べてなかったんでしょ？」

「思ったより元気だなコイツ…」

現在場所は青野整形外科、大樹の実家であり大樹の部屋である。

寝ている最中手当てを受けたユーノは、目を覚ますなり盛大に腹の虫を鳴らし、大樹の母親が手料理を振る舞ったのが今の状態だ。

「それにしても、入院しなくて済んだし良かった」

「よかねぇだろ、コイツがユーノだって事何で言わねーんだよ」

「いや…特徴は絵で説明してたじゃないか、主にフェレットの絵だったけど」

「だから分かる訳ねぇだろが！」

スパゲティを頬張っていたユーノがビクリと肩を竦める。

「あぁ、気にしないで大丈夫だよ、青野は口が悪いんだ」

「は、はぁ」

「んだと！？」

バンッ！とテーブルこたつを叩きながら立ち上がった大樹、だが一階から「たいちゃん静かにしなくちゃだめよ～」というおっとりとした癒し系である母の声が聞こえ、苦虫を噛み締めたような表情を浮かべながら再び座り込んであぐらをかく。

「チッ！」

「青野が親の言うことをちゃんと聞く光景はやっぱり何度見ても違和感があるよ…」

一見すると反抗期真っ只中の少年だが、両親との関係は良好で、良途は大樹が両親に反抗している姿を見た事がなかった。

「ごちそうさまでした…あの、僕はユーノ・スクライアと言います。助けて頂いてありがとうございました」

「いえいえ、僕は橘良途、こっちは青野大樹。あ、それと変にかしこまらなくて大丈夫だよ、同い年くらいだし」

オレンジジュースを飲み干し、ようやく一息ついたユーノは深々と二人に頭を下げた。

「で、お前なんでアイツに襲われてたんだ？」

「…わからない、突然襲って来たんだ。デバイスを渡せって言ってたけど…考えられる理由はそれくらいしか」

「なる程…」

良途は目を瞑り顎に手を当てる。考えているのは襲撃者の事ではなく、ユーノ・スクライアに出会ってしまった事についてどうすべきかだった。

恐らくこのままいくと、なし崩し的にユーノはジュエルシードの事を自分達に話すだろう。

性格上大樹は絶対に首を突っ込む、だがそうなるとユーノと高町なのはが出会う可能性がぐっと低くなる。

そしてもしユーノが協力を願い出て来た場合、魔力の知識を持つ自分達がそれを断った場合、なのはと出会ったとしても魔法を使え

る人間が他にもいる事をなのはに言われかねない。

『協力はむり、あと自分達の事も他言無用でよろしく』

などとは言える筈もない。

（困った…もっと良く考えて慎重に行動すべきだった）

「驚いたよ、まさか管理外世界に魔導師がいるなんて」

「探しゃ他にもいるぜ、あんま数はいねぇけどな」

（なんかいつの間にか僕を置いて会話進めてるし…はぁ）

なんとかするしかない、良途は楽しげに話す二人を見ながら一人ため息を吐いた。

◇

翌日、大樹の家に一泊したユーノはそのまま二、三日休養を取るよう大樹の両親に言われ、大樹の家に厄介になる事になった。

食費や治療費、何より自分の身元を気にしていたユーノだったが、大樹の両親は何も聞かず、お金はいいので大樹と遊んでやって欲しいと頼まれた。

曰わく大樹が友達を家に連れて来たのはユーノで二人めらしく、

学校では口調の悪さとややつり上がった鋭い目つきで人から恐れられているらしかった。

「んじゃ俺は学校行ってくる、暇なら適当にテレビとか見てろ」

「ありがとう。それにしても、…ご両親が言ってた通り君は口調で損してるなぁ」

「ほっとけ」

大樹の通う小学校は制服がなく、私服登校出来る学校の為、大樹は青いパーカーに黒のジーンズと言う楽な格好で家を出た。

基本的に大樹はオシャレに興味がなく、私服もフード付きパーカーが多い、着心地優先なのだろう。

「そういやあの赤髪…俺の学校の生徒じゃ見た事ねぇけど、リョウトの野郎はどうだったんだ？」

ふとした疑問に頭を悩ませつつ、仕返しに来た時は返り討ちにすればいいと結論付ける。

考えても分からないことは分からない、なら考えるだけ無駄、そう考えるのか大樹だった。

その日の放課後、大樹は真っ直ぐ家に帰ろうとしていた。

ちょっとした調べものがあると言って、良途が魔法の訓練と勉強（リリカルなのはにていて）は自主してくれと連絡して来たからだ。

（相変わらず忙しい野郎だ）

途中、公園前を通った時にどこか見覚えのある三人組とすれ違った。

栗色の髪を両サイドで縛った少女、少し鋭い目をした金髪の少女、おっとりとした紫髪の少女の三人だ。

どこかで見た、そう思いついつい視線を向けた所、睨んでいると思われてしまったらしく金髪から睨み返され、茶髪の少女は少し身を縮めた。

（どっかで見たよな？アイツら…どこだ？まぁ…いいか）

まさか友人の書いた絵でそれらしい少女を見ていたとは気付かず、しばし通り過ぎた後振り返って見ていたが興味をなくし正面に向き直る。

その時、公園の奥の森で何かが素早く動くのを見つける。

（何だ？野生動物にしては動きが…）

大樹は小走りで森に足を踏み入れる、夕暮れ時と言う事もあり虫や鳥が鳴き、風が草木の葉を揺らす度に特有の葉音が響く。

戦闘体勢に入っていない大樹から、謎の物体の気配を消してしまうには十分だった。

一際強く風が吹き、まるで葉音が危険を知らせるように鳴り響いた瞬間、大樹は真横から体当たりを受け吹き飛ばされた。

「っ！？なんだコイツは！？」

木に背中と後頭部をを打ち付けるが、なんとか足を踏ん張り倒れる事を拒否して左手で肋を抑える、バリアジャケットもなく、まだ９歳である大樹の体は冗談では済まされないダメージを負った。

大樹に体当たりした物体は黒い雲のような体をし、目が二つついていた、明らかに地球上の生物ではない。

「クソが！」

セットアップと同時にアルターを発動させる大樹だが、突然破裂した物体の身体がショットガンのように身体を襲い、もたれていた木を砕いて更に後方へと転がる。

そのショックで右腕に分解した粒子が定着せず、右腕にはシェルブリットが装着されていない。

「…く……じ、上等だよ…てめ…ぇ」

最初に受けたダメージで、既に肋をやられた大樹は両腕を地面につきヨロヨロと立ち上がる、だが立ち上がった瞬間、再び謎の物体による攻撃を受ける。

強がって見ても、既に大樹は戦闘不能なのだ、せめてもの救いは、バリアジャケットの強度が高く死にはしない事だが、その分ひたすらに痛みを味わう事になった。

◇

「タイキ遅いな…」

既に時刻は午後６時、大樹の部屋で帰りを待つユーノは嫌な予感を感じていた。

寄り道する際は必ず連絡する大樹がこの時間まで帰って来ない事で、両親も心配し携帯に電話したのだがコールはするが出ず、現在学校と良途の家に電話している所だ。

ユーノが窓から町並みを不安げに見つめていると、大樹の母親が階段をあがり部屋へと入ってきた。

「あ！タイキ君見つかりましたか？」

「それが学校にも良途君の家にもいないの、私達は探してくるけど、ユーノ君は安静にしててね。あ、夕御飯はちょっと遅くなるかしら、ごめんなさいね」

「あ、いえ…」

そう言って大樹の母親は足早に部屋から出て階段を下りていった。

その後すぐに玄関が閉まる音が響き、家の中はユーノだけになった。

（念話にも答えないし…やっぱり僕も探しに行こう）

昨日突然襲われた事が頭から離れず、まさかと思いユーノも探しに出る事を決める。

まだ体力と魔力が回復しきらない為、変身魔法で体をフェレットに変え窓から飛び出した。

この姿ならば人間の時より鼻も効く、何より消費魔力などの事もあり色々と都合が良かったのだ。

（とりあえず魔力を頼りに探すしかない！）

ユーノは恩人の一人を探しまだ全快していない体を動かし走り出した。

出会って良かったのか？（後書き）

なのは、アリサ、すずかに遭遇した大樹。
だがやはり良途の絵は下手なのか大樹がアホなのか気づきません。

そしてその後訪れる不幸…

大樹もやはりまだ9歳、というよりバリアジャケットなしで暴走体の攻撃を受けて死ななかったのが既に人間離れしたタフさなのかな？

そしてユーノと会い、ジュエルシードの暴走体がいる筈だと探している良途は完全に出遅れてしまいました。

現在かれは動物病院付近を捜索中です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4477z/

りりかる☆マジ狩る

2011年12月17日07時55分発行